

E. T. ジェンドリンの哲学（その2）

— 言語表現の恣意性の問題と現象学的「解明」 —

The Philosophy of E. T. Gendlin, Part II

諸 富 祥 彦

Yoshihiko MOROTOMI

I はじめに

前稿（その1）⁽¹⁾では、1960年代と70年代に書かれた二本の論文⁽²⁾を中心にジェンドリンによる現象学と言語分析に対する批判を検討した。

ジェンドリンによれば、現象学と言語分析という二十世紀を代表する二つの哲学はいずれも、①我々は、生きられる経験を主張のための基礎として、いかにして用いるのか、②その結果選ばれた図式は、単に押し付けられただけの別の図式といかなる点で区別されるのか、という二つの課題を解決できていない。両者はいずれも、これらの課題を、「ただそう感じる、と言うだけの未検討な状態」⁽³⁾に放置したまま、と言うのである。

ジェンドリンが提示するこの二つの課題は、より根本的には、次の一つの課題へと帰せられる。「～が正しいと感じられる」という生きられる経験を未検討な状態のまま放置せずに、この「生きられる経験」の緻密な検討により、ある言明が現象学的に基礎づけられる時の、明確に識別可能な「基準」をとり出す、という課題である。あるいは、現象学的な基礎づけの「条件」を明らかにする、という課題である。

この問題はまた、現象学における「言明の恣意性の問題」の解明にとっても重要である。この基準が明確にされるなら、「～と感じられる」という主観的な領域に基礎づけを求めるにもかかわらず、現象学においてどんな言明でも正しいとみなされうるわけではないこと、また、ある言明が（現象学的に）選択され、他のさまざまな言明が捨てられることには、ある根拠が存在するということが主張できるだろう。

端的に言えば、この作業が成功すれば、現象学には、言明の恣意的な使用を許容しない基礎が存在する、ということが明らかとなるのである。

本稿（その2）では、ジェンドリンが現象学的基礎づけの「基準」という問題にいかにか答えたかを論じる。

II 根本的転換

上述の二つの問題を解決するには、現象学という方法に、ある根本的な「転換」が要請されなくてはならない、とジェンドリンは言う。

その「転換」とは、次のようなものである。

「ある解決に到達し、ある成功する現象学の方法を手に入れるには、我々はある根本的な転換（a fundamental turn）、新しい出発（a new beginning）を始めなければならない。・・・言明の側にだけ立つのを止めて、相互に影響をあたえあうものとしての言明と経験の両方に着目しよう」⁽⁴⁾。

「経験は言明から影響を与えられずになされるという見解から自由になろう。明らかだが、我々が経験を言葉にする時、言葉にされないままのあるがままの経験を言葉にすることはできない。思い切って危険に飛び込み、経験を言葉にするという行為が経験に影響を与えるさまざまな仕方を研究しよう」⁽⁵⁾。

ジェンドリン自身、「根本的な転換」「新しい出発」といった表現を用いているように、この引用文には彼が上述の問題を扱っていく際の基本的な着想が述べられている。

それは、およそ以下のようなものである。

従来の現象学においては「経験」と「言明」の関係は次のように考えられてきた。経験、中でもとりわけジェンドリンが重要視する漠然としたあいまいな経験は、意識が能動的につくり出すものではなく、いわば意識の「外部」から自ずと訪れてくるものである。したがって、それに対しては受動的な構えをとるほかに、我々に可能なことは、可能な限り正確に、また純粋に経験を記述し、言葉にすることだけだとみなされてきた。つまり、我々は、経験と言明の関係を考える時、通常、常に言明の立場に立って、「どれだけ経験に近づきうるか」「いかにしてあるがままの経験を言葉で正確に写しとることができるか」だけを追求してきたのである。言明と経験との関係は、言明から経験へ、という一方通行でしかない、と考えられていたのである。

しかし、この見方は次のような理由で誤りだ、とジェンドリンは言う。

まず、言明は経験をあるがままに写しとり、記述することは不可能である。既に述べたように、経験を何らかの言葉にすることは、自ずとある言語図式を押し付けることにつながるからである。

そればかりではない。根本的な誤りはむしろ、上述の考え（言明が経験をあるがままに写しとるという考え）では、「経験」は静的な実体として、いわば我々が写生しようとするモノのようなものとみなされている点にある。

経験はそのような静的・固定的な実体ではない。そればかりか、経験を純粋に記述し、言葉にしようとする、まさにその行為それ自体が、（その記述にある点で成功すれば）当の経験に影響を与え、その経験そのものを変えてしまうのである。

経験を明確な言葉にすることは当の経験を変えてしまう⁽⁶⁾。記述したと思ったその経験は、まさにその記述という行為によって既に違ったものになってしまっている。

従来の現象学では、言明が経験に対して持つこのような影響力に着目していなかった。経験と言明とを相互に影響しあうものとして考察すること、このことが重要なのだ。

上述の引用文でジェンドリンが「根本的な転換」「新しい出発」というのは、このことなのである。

ジェンドリンが言うように、経験と言明とを相互に影響するものとみるならば、これまでおこなわれてきた「経験をできるだけあるがままに写しとる」という努力自体、背理とならざるをえない。

では、我々に残された方向は何か。何が我々には可能なのか。

ジェンドリンは言う。

「我々になしうることは、それは、経験が言葉にされていくまさにその過程において経験を研究するということ（to study experience in the process of being stated）である。この新しいアプローチでは、我々は自分の立脚点を、言明の方にも、それについては実は何も言えない、あるがままの経験の方にも置きはしない。我々はむしろ、相互に影響を与えあう過程において生じてくる、経験と言明の両方（both experience and statement as they occur in the process of affecting each other）を研究しうるという立場に立つのである」⁽⁷⁾。

経験を何か静的な実体のようなものとみなしてはならない。経験を明確な言葉にし、それによって経験が変化し、またその変化した経験を言葉にしていく、という一連の「過程」の研究こそが重要だ、とジェンドリンは言う。

ここにおいて、経験もしくは感情と、言語その他のシンボルとの「機能的関係」、あるいは両者が有効に関係しあい、機能していく過程についての考察というジェンドリン思想の中心課題がはじめて正面に据えられるわけである。

Ⅲ ジェンドリン現象学の「基準」——「解明」の生起——

先に我々は、ジェンドリンによる「経験」と「言明」の関係に関する発想の転換、「経験は、言明とは無関係に存在し、それ自体で可能な限り正確に記述しうる」とみなす立場から、「経験は明確な言葉にされていくその過程において変化していく」という立場への転換についてみた。

前者の立場をとる限り、我々は（経験それ自体を完全に正確に言葉にすることは不可能であるため）経験にある恣意的な言語図式を押し付けることで満足せざるをえなかった。

しかし、後者の見方によれば、「経験内容と言明の内容の一致」を目標とすること自体、背理である。経験はどのような静的なものではなく、明確な言葉にされることそれ自体によって変化していくものだからである。

では、後者の立場をとると、「現象学における恣意性の問題」はいかにとり扱われうるであろうか。

言葉にされることによって経験が変化してしまうのであれば、言明内容と経験内容が一致することはありえない。したがって、「経験内容と言明の内容の一致」という古い目標に固執するなら、我々は、途方にくれるしかないだろう。

では、ジェンドリンはこれにどう答えるか。

この問題に対するジェンドリンの答えは、次のように革新的なものである。

ジェンドリンは後者の立場をとることで、もはや「経験と言明との一致」という目的をそれ自体背理なものとして断念する。そして、(一見、言明の恣意性の問題をさらに混乱させるだけのように思える)「言葉にされることによって、経験は変化する」という経験の性質に着目し、そこにこそ言明の現象学的基礎づけが求められる、と考える。言明過程における経験のこの性質に着目してこそ、「ある言明が現象学的に基礎づけられる時の、明確に識別可能な基準をとり出す」ことが可能になる、と考えるのである。

いかにして、そんなことが可能になるのか。

ジェンドリンが言う、その「基準」とは何か。

ジェンドリンは、既に引用した例を使ってこれを次のように説明する⁽⁸⁾。

AがBに対して、「あなたは疲れていますね」と言ったとしよう。

Aのこの言葉を現象学的に基礎づけようとするれば、Bは既に何時間働いたか、とか、Bの表情に疲れはあるか、といったことは問題ではない。

この言明の現象学的な真偽を決するには、Bが自分の身体感覚に直接に注意を向けて、そこに「疲れ」と言われているような何かが見出せるかどうか、確かめなければならない。もしBが「疲れ」というのがびったりくる感覚をそこに見出せれば、Aの言葉はこの時点では真だと言えるし、見出せなければ偽だと言っているのである。

ここで注意すべきは次の事実である。

たとえ、Aの問いへの答えとして、Bが自分の身体感覚に「疲れ」が存在することを認めた場合でも、BはAから「疲れている」ことを指摘されるまでは、自分が疲れているとは感じていなかった、ということである。したがって、Aの発言がおこなわれるまでは、(Aがたとえ同じ内容のことを考えていたとしても)Aの発言内容は真とは言えない。Aの発言が、Bにみずからの身体感覚に問い合わせるよう促し、Bが「疲れ」と呼ばれるある経験を特定化し、識別するよう導くことで、Aは自分の発言を真にしたのである。

つまり、Aの発言内容は、発言が実際におこなわれ、Bの行為を促すことで、真になったのである。たしかに後で「疲れ」と呼ばれるようになるある感覚は、(Aの発言の前から)既に存在していたではあろう。Bが自分の手でこの感覚をつくり出したのではないのである。Bは、「この感覚は存在していたが、自分はそれに気づけなかったのだ」と思うであろう(この点で、このケースは、AがBに悪い報せを伝えたことでBに突然疲れが押し寄せる場合とは異なる。後者の場合、「疲れ」を自覚する前と後の連続性が存在していない)。

より正確に言うなら、「疲れ」としては、それはAの発言以前は存在していなかったのであり、Bが自分が注意を向けている経験のある側面を「疲れ」として新しく特定化することで、「疲れ」は生まれた、のである。

さらに問題となるのは、次のような場合である。

はじめは、自分の身体感覚を「疲れ」という言葉で表現していたBが、しばらくの間、その感覚を感じ続けているうちに、この「疲れ」という言葉は必ずしも自分の身体感覚にふさわしくないことに気づき、「私は正確には疲れている(tired)わけではない。少々、うんざり(weary)してきているんだ」と言ったとしよう⁽⁹⁾。

この時、Bは自分が何故「疲れ」より「うんざり」という言葉の方を選んでいいのか説明はできない。しかし、この言葉が自分の身体感覚を「正しい方向を指し示している(pointing in the right direction)」⁽¹⁰⁾のは確信できている。

さらにBが、「自分には、何故“weary”は真だと思えるのに、“tired”はそう思えないのだろう」と自問するとしよう⁽¹¹⁾。

Bは次のように考えるかもしれない。

「ええっと、・・・この感覚は、『疲れている (“tired”)』という類のものではなくって、『うんざりしている、飽き飽きした (“tired-of”)』といった類のものなんだ。だから僕は、『うんざり (“weary”)』と言ったんだ。今取り組まなくてはならないこの仕事を、僕はもう続けたくない。しんどすぎるよ」⁽¹²⁾。

こう言った後で、Aはしばらくして、次のように言うかもしれない。

「僕は、ただ、しばらく外に出て、楽しく過ごしたいだけなんだ。まったく疲れ切っている、というわけではないんだ。—それで次の仕事にとりかかりたくないんだ。この仕事は、今やるには、きつ過ぎる」⁽¹³⁾。

Bは、このように自分のある身体感覚に直接に注意を向けながら、以前は「正しい方向にある」と自分で思っていた言葉を、次々と否定していく。以前選択していた言葉を次々と否定し、新しい言葉を選んでいながらもかわらず、彼が語ろうとしている対象が変化しているわけではない。

Bには次のような思いがあるはずだ、とジェンドリンは言う。

「私は、ずっと『同じこと』について語っている。自分が前に言ったことをきっぱりと否定しているにもかかわらず、私が今語っているものは、私の感情がそれで『あった』ものと同じなのである」⁽¹⁴⁾。

このようにBは、同一の身体感覚に注意を向けつつ、それを次々と新しく概念化していくことができるのである。この点について、ジェンドリンは次のように言う。

「経験のこの側面—既に言語化されたものとの関係において、さらに図式化され、まとめられていくという、その果てし無い可能性—及び、それによって、確かにそれはそれで『あった』と今になって言えるような諸側面を明らかにしていく、という可能性は、これまで、哲学において全く認識されてこなかった。そのため、解明 (explication) に含まれている多様なステップのための、いかなる体系的な方法も案出されてこなかった」⁽¹⁵⁾。

上述の例に明らかなように、経験には、同一のそれに注意を注ぎつつ、何度も新しく概念化される、という可能性がある。そしてこの概念化に伴って、今まで主体によって気づかれていなかった経験の諸側面が明らかになっていく—上の例では、まず自分は「疲れている」という側面が、次に「うんざりしている」側面、さらに「しばらく外に出たい・・・」という側面が明らかになっていっている。

ジェンドリンは同一の経験を何度も再概念化し、それによって、その経験のそれまで隠されていた側面を明らかにしていく、というステップから成るこの行為を「解明」と呼ぶ。そして従来、哲学においてほとんど注目されてこなかった、この「解明」という行為の成否にこそ、現象学的基礎づけの基準は求められる、と考えるのである⁽¹⁶⁾。

ジェンドリンは言う。

「ある『良い』解明の言明 (a “good” explication statement) は、我々を、以前は気づいていなかったある側面に直接に気づくように導く。これこそがまさに、『解明する言明 (explication statements)』を、新しい何かを直接の気づきにもたらずこと (bringing something new to direct notice) に成功しない多くの言明から区別する、際立った基準 (a striking criterion) である」⁽¹⁷⁾。

ある言葉の使用により、解明に成功するならば (今まで気づかれていなかったある側面に我々が気づけるならば) その言葉の使用は正しい方向にある、つまり真だ、とジェンドリンは考える。この解明こそが、(「経験内容と言明内容の一致」という伝統的な基準の代わりに) 現象学的基礎づけの基準としてジェンドリンが提示するものなのである。

「解明」を真の基準とするジェンドリンのこの着想を採用するならば、さまざまな点で発想の転換が迫られることになる。

まず、ある言明の真偽をそれ自体単独で論じることが不可能になる。真偽は、その言明が用いられることによつて、「解明」というある種の過程が、ある種のステップが生じるか否かに関して判定されるようになるからである。

ジェンドリンは言う。

「ある一続きの思考や会話 (a given chain of thought or speech) が真の現象学的な解明 (a true phenomenological explication) であると確信を持てるならば、我々は少なくとも、その会話や思考は、ある仕方であるステップを前進させる (move a step forward) だろう、と確信を持つことができる。このように、ある単独の言明 (a single statement) のための真の基準ではなく、ある種の過程のための真の基準 (a truth criteria for a kind of process)、各々のステップが前のステップと関係しているような、ある種のステップのための真の基準 (a truth criteria for a kind of step) が存在する」⁽¹⁸⁾。

こうしてジェンドリンにおいては、言明の真偽は、その「内容」の妥当性に関してでなく、それが使用されていく「過程」に関して問われることになる。経験のある側面に焦点を当てつつ、それを何度も概念化していく過程において、新しい側面が浮かび上がり、気づきをもたらされるならば、その「過程」は真の方向にある、と云う。逆に何も新しい側面を浮かび上がらせず、気づきをもたらさないならば、その「過程」は偽だと言われるのである。

次に、「解明」を現象学的な真の基準とする場合には、言明の役割にも変更が加えられることになる。従来の現象学では、通常、言明の役割は、人間の経験を可能な限り純粋に記述し、写しとることに、また、人間存在の普遍的構造を可能な限り正確に言い当てることにあるとみなされていた。「純粋な経験それ自体」や「人間存在の普遍的な構造」にいかにか近づくことができるか、いかに的確に言い当てることができるか、が問題とされてきた。

しかし、ジェンドリンは言明の役割をこのように静的なものとはみなさない。

むしろ、次のように考える。

「重要なのは、次の点である。ある記述 (a description) の結果、(その言葉がいかにか粗野なものであれ) あなたが以前には気づいていなかった側面に直接に気づくかもしれない。その記述を、一組の構成概念 (a set of constructs) として評価するのではなく、一組の指し示す言葉 (a set of pointers) として評価せよ」⁽¹⁹⁾。

現象学における言明の役割は、まだ気づかれていない暗黙の側面を指し示し、その側面を明らかにせしめ我々に気づきをもたらすこと、すなわち「解明」することにある、とジェンドリンは言うのである。ジェンドリンは、現象学的な真の基準を従来のものとは全く異なった方向に求め、それを言明の内容から、言明を「使用」していく過程の性質へと、移行させるのである。

このように、ジェンドリンの経験的現象学は、ある言明それ自体の単独での正しさに固執しない。むしろ、ある言明が現象学的に正しい「過程」「方向」「ステップ」において「使用されること」を真の基準として重視する。何らかの新しい側面を浮かび上がらせるように使用されることを重視するのである。

そしてある言明が、このように現象学的に正しい方向で使用され、今までは覆われていた新しい側面を浮かび上がらせるのに成功するならば、この新しい側面はしかし、それを浮かび上がらせた当の言明自体にはもはや適さないものとなり、それを否定するはずである(上の例では、「うんざり」という言葉で浮かび上げられた新しい側面は、もはやこの言葉では不十分なものとなっており、「外へ出る」という別の言葉を必要とするようになっている)。つまりある言明の現象学的基礎づけという行為は、基礎づけられたその言明自身を不十分なものにしてしまい、それを否定するのである。

したがって次のように言うことができる。

ジェンドリンの言う現象学的基礎づけによる「真」は、他の類の基礎づけによる場合とは異なり、ある言明や、その言明が指し示す事態の妥当だけを言うのではない。ジェンドリンによれば、ある言明が現象学に「真」であるとはむしろ、その言明の使用によって、(いずれその言明自体の否定を導くような) 事態の新しい側面を浮かび上がらせる、ということなのである。現象学的な過程の中で有効に機能している、ということなのである。

ジェンドリンの言う言明の現象学的な基礎づけとは、このようなダイナミックな性質のものなのである。

IV 「解明」と「言明の恣意性の問題」

以上、ジェンドリンの現象学における真の基準である「解明」とはいかなるものかを述べてきた。

では、この「解明」を現象学の基礎とするならば、本稿の中心課題である「言明の恣意性」の問題はいかに解決されるであろうか。このことを次に論じる。

現象学における「言明の恣意性」の問題とは、簡略に言えば、次のようなものである。

従来の現象学では、経験を純粹なあるがままの姿で、何の言語図式や解釈も押しつけずに記述することを目指していた。しかしそもそも、「記述」という行為は言語図式の使用なしには不可能であり、しかも（経験は言葉に置き換えられると変化してしまうものなので）それが記述される以前の経験と完全に一致することなど不可能である。

このため、現象学者が経験を純粹に現象学的に記述しようとした結果は（結果として残された言明は）、そこで現象学的方法が用いられているにもかかわらず、相矛盾するものとなる。言明の内容の次元での衝突は避け難いのである。

では、現象学における言語図式や解釈の使用には、何の明確な基準も存在しないのか。

現象学者たちはそれぞれ、自分の好みの（恣意的な）言語図式や解釈を押しつけることしかできないのか。このような問題の解決が求められたのである。

「解明」を基準とするジェンドリンの現象学では、これらの問題は次のように解決される。

ジェンドリンはまず、経験の純粹な記述を目指す、という従来の現象学の意図自体を背理とみなす。この意図は、記述するという行為によって、経験自体が「変化」してしまう、という事実を見逃しているからである。

経験の同一の側面はそれに注意を当て続けることによって、何度も記述していくことができる。そして新しく記述され、言語化されていく度に、経験はそれまで暗黙のものであった側面をあらわにし、変化していくのである。

ジェンドリンは、新しく記述され言語化されていく度に、経験が自らの暗黙の側面をあらわにしていくこの過程に着目し、それを「解明」と呼び、その過程の生起をこそ、現象学の真の基準としたのである。「解明」の過程が生起することが（経験の暗黙の側面を明らかにすることが）ジェンドリンの現象学における真なのである。

真の基準を「解明」の生起に求めるこのジェンドリンの立場に立つならば、「言明の恣意性」の問題は、次のように言い換えられうる。

「解明」は、いかなる恣意的な言明によっても可能なのか、それともある特定の言明の使用によってのみそれは可能なのか、と。経験の暗黙の側面を明らかにするためには、いかなる言明でも通用するのか、それともある特定の言明でなければならないのか、と。

この問いにジェンドリンは、次のように答える。

「解明するという活動 (the activity of explicating) は、経験の過程を推進し (carry forward), それを明確に言語化し (formulate), それをさらに創造的に形成する (creatively shape it further)。しかし所与の感情は、いかなる言語化の試みでも支持するように機能するわけではない。・・・非常に幸運なある言語表現だけ (only some very fortunate formulations) が、直接に感じられるものから、これらの特質ある反応を獲得するのである (我々は、そんな表現をまったく見つけることができないことがしばしばある)」⁽²⁰⁾。

ジェンドリンはここで、経験の暗黙の側面が明らかにされていくことに「推進」という独特の表現を当て、この「推進」を引き起こすのが可能なのは、「非常に幸運なある言語表現だけ」であること、そしてその表現を見つめることはしばしばそれがまったく不可能となるほどに困難であることを指摘している。

「直接に感じられるものからの特質ある反応」を引き出すこと、つまり、我々にそれまで暗黙にしか知られていなかったことを気づきにもたらすという「解明」の行為に成功するごわずかな言語表現だけが真であり、それに失敗する他の多くの言語表現は全て偽なのである。これが、ジェンドリンの現象学における「言明の恣意性」

の問題への解答である。「解明に成功する言明はごくわずかなものに限られる」という事実、この事実が現象学に言明の恣意的使用を許さないはずだ、と言うのである。

我々が、自分自身のあいまいな感情を言葉で表現しようとする時、その感情にまさにぴったりきて、そのあいまいさを少しでも明確にしうる言葉は、ある特定の言葉でしかない。その言葉は、主観的には「その言葉でしかありえない」と感じられるものであろう。

たとえば、詩を創作している時のことを思い起こしてみよう。詩の最後の行にどんな言葉を入れるかは、当然論理的な仕方では規定されていない。にもかかわらず、そこに入れられる言葉は当人にとっては恣意的な問題ではまったくなく、他には置き換えられないものであろう。

ジェンドリンの指摘は我々のこの経験的事実に一致している。

では逆に、解明に成功する言明はあらかじめ（経験の方から）完全に規定されているのであろうか。そうではない、とジェンドリンは考える。

「一方では、我々が感じている直接に経験される『暗黙の』知は、言語表現を完全に決めてしまいはしない。我々をさまざまな仮説や相矛盾する可能性へと開かれたままにしておく」⁽²¹⁾。

我々が直接に経験する暗黙の知は、それを適切に表現するのにいかなる表現でも許容するわけではない（恣意性を許さない）。「解明」に成功するのはごくわずかな言語表現のみである。しかし、同時にそれは適切な言語表現を決定してしまうわけでもない。我々は解明において、相矛盾する言語表現の可能性へと開かれたままであり、そこで選択を要請されている。

このように「解明」とは、「多様な仕方で生じうるが、決して恣意的なものではない」⁽²²⁾ という両義的な性質のものなのである。

ある面で規定されておりながら、しかし同時に、完全に規定されてもおらず、さまざまな可能性へと開かれたままである、というジェンドリンのこの発想は、単に言語表現に関してだけでなく、あらゆる人間事象に適用されている。ジェンドリンは言う。

「私は、自分の感情や状況からお望みのものを何でもつくり出すことができるわけではないし、感情や状況のある明確な仕方で与えられたものとみなしうるわけでもない。私は状況をさらに構造化しなければならない。このさらなる構造化は、状況が切りとられ、規定されている仕方を超えて進まねばならない——少なくとも、私にとって問題である状況においては。他方、私は状況の内にとどまらなくてはならない。そうしないと、どんな現実的で実行可能な一連の行為も現れてはこないだろう」⁽²³⁾。

我々がその中にある「状況」は、常に既に何らの仕方で規定されている。ある一定の構造を有している。したがって我々が完全に自由だということはあるまい。我々が自分は自分の好きなものを恣意的につくり出すことが可能だ、と錯覚し、状況にとどまるのを拒否するならば、我々の選択する行為は、まったく現実性を欠いたものになってしまう。

しかし同時に我々は、自らのいる状況をまったく動かし難いもの、不変のものとみなしてはならない。そうすると今度は我々から自由が失われてしまう。我々は状況のこの規定性を超えていかなければならない。我々は、状況の中にとどまりつつ、自己の可能性を選択していかねばならないのである。

この点に関してジェンドリンはさらに次のように言う。

「人と状況とは相互に重なり合っている単一の体系 (a single interlocking system)」⁽²⁴⁾ であり、「ある状況は、既に形成されてしまっており、何ら変化することなく同一であり続けるもの (“is”) ではない。状況は、むしろ、その状況にぴったりとき、それを変えるような行為へと向かっている (“is-for”)。状況はそれ自体である変化へと向かっている」⁽²⁵⁾。そして「この要請は、無秩序なものではなく、半ば自由であり、半ば決定されている」⁽²⁶⁾。

ここでは、次のようなことが言われている。

人間にとって自らの状況は、自分とは切り離されたものとして立ち現れてくるわけではない。それ自体ある変化を求め、その変化のために人間にある特定の行為を要請してくるものとして立ち現れてくる。そしてそこで要請される行為は、状況の事實的側面によって半ば決定されているが、半ば未決定であり、最終的には、個人の主体的選択に委ねられるのである。

この問題についての検討は、ジェンドリン哲学の価値論的・倫理的側面に立ち入ることになる。

ここでは、「解明」において採択される言語表現は恣意的なものではないが、最終的には主体的選択に委ねられているとする、言明の問題に関するジェンドリンの独自の思想の基礎には、以上のような人間観（状況から半ば規定されつつ、同時に、半ば自由である、とする人間観）が控えていることを指摘するにとどめておく。

これについては、また、稿を改めて論じたい。

V おわりに

以上、ジェンドリンの経験的現象学を検討し、そこで言明の恣意性の問題にいかなる解決が与えられてきたかをみてきた。

その要点を整理すると以下のようなになる。

従来の現象学においては「あるがままの純粋な経験の正確な記述」が試みられてきた。

ジェンドリンはこの基本的前提を退ける。そこでは、経験は記述され、言語に置き換えられることによって変化する、という事実が見逃されている、と考えるからである。

そして、この事実を認めると経験の純粋な記述は原理的に不可能なことになる。

この事実を端的に認めた上で、ジェンドリンはむしろ、(経験は言葉にされることで変化する、という)この事実に着目し、そこにこそ、現象学における言明の真の基準は求められる、とみなす。これは、きわめてラディカルな発想の転換である。

ある経験の記述には、唯一これだけが正しい、という絶対的な記述は存在しない。ある経験をできるだけ正確に記述しようとする同一方向の試みにおいて、その経験を異なる表現を用いて何度も記述しなおすことが可能である。

そして重要なことは、この多様な言語表現を用いての再記述は、もしそれが正しい方向でおこなわれているならば、それまでは覆い隠されていた経験の諸側面を浮かび上がらせ、我々に気づかせてくれる、ということである。新しい側面を浮かび上がらせることによって、経験は以前とは変化してしまっている。ある言明の内容的な真偽が問題なのではない。それを使用することによって、経験の新しい側面を浮かび上がらせ、それを変化させることに成功するか否か(「解明」に成功するか否か)こそが問題なのであり、それに成功することが「真」なのである。

以上のような仕方では、ジェンドリンは、現象学的な真の基準を従来のものとはまったく異なった方向に求める。言明の内容から、言明を使用していく過程の性質へと、真の基準を転換するのである。

この基準を採択するならば、現象学者たちの間で用いられる言明の内容上の差異は問題とならない。問題となるのは、それぞれの言明が、果たして、じゅうぶんに「解明の過程」を経たものであるか否かであり、その表現の使用によって新しい何かを浮かび上がらせることに成功したか否か、である。現象学者には、みずから意を尽くして、経験の正確な記述につとめ、新しい何かを浮かび上がらせることのみが、求められるのである。ジェンドリンの現象学における「真」とは、このように、各々の「内面において」のみ、確かめられうるものなのである。

現象学の創始者フッサールが、意識に直接に与えられるもの(内在)だけを認識の確実な根拠とみなし、意識にとって疑いえないものとして妥当してくるものを「存在する」とみなしたことを省みるならば、ジェンドリンの解決はフッサール現象学の基本姿勢の徹底により、その内在的問題の克服を意図したものと言えるだろう(この文脈に即して言えば、ジェンドリンの言う「解明」とは、ある言明が個人の意識の内部で、疑いえないものとして「なっていく」過程であると言える)。

しかもその際、人間の自由を基盤に据えた実存的な観点をとりながらも、人間や状況の持つ規定的、事実に側面をも考慮することにより、言明の恣意性の問題を放置せず、各人によって内的に確認可能な明確な基準（「解明」の成否）を提示するのに成功した点は評価されるべき点であろう。

なお、改めて論じる必要のあることであるが、ここで多少触れておくと、本稿で論じたジェンドリンの現象学は、治療場面を具体的に検討する際の有効な理論的枠組みたりうるものである。

学派によって若干の相違はあるものの、多くの心理療法では、その目標よりも「過程」を重要視し、治療過程の自発的な展開を見守り、そのおのずからなる展開がじゅうぶんに展開していくよう、治療者はその「促進者」としての役割を果たす。ここが、症状の除去を目的とする外科的治療と大きく異なるところである。クライアントの自然治癒力の発揮こそ治療の最大の決め手となる心理療法では、クライアントの「うちなる自然」の自発的な展開、さらには、さまざまな要因が複雑に絡み合う治療の「場」のプロセスが、それ自体行きたがっている方向にじゅうぶんに行かせることが一つの眼目となる。

したがって心理療法家には、あらかじめ決められた正しいふるまい、「真」の基準はまったく与えられていないのであり、ある言葉の使用が、それによって経験の新しい側面を浮かび上がらせうるならば（「解明」に成功するならば）「真」であるとみなすジェンドリンの現象学は、それを言葉に限らず、ふるまい、音声のトーン、イメージなどにも広げるならば（そしてもちろん、ジェンドリンの現象学にはそのような広さが認められるのであるが）、治療場面における心理療法家の言動を基礎づける哲学的な根拠ともなりうるものである。

たとえば、わかりやすい例として、「解釈」の問題をとりあげてみよう。

ある心理療法家があるクライアントにある「解釈」を与えたとする。

ジェンドリンによれば、その解釈が現象学的に正しいかどうかは、その解釈の「内容」によっては決まらない。その解釈を与えることで、クライアントや心理療法家にとって、「それまでも既にそこにありはしたもののまだ覆い隠されていた何か」が浮かび上がってきたかどうか。新しい側面が何か浮上したかどうか。つまり「解明」の過程は生じたかどうか。クライアントや心理療法家にとって何かが変わり、それが正しい方向にあると感じられるかどうか。それこそが問題なのだというのである。

要するに、解釈の内容の妥当性ではなく、解釈を与えることで何が起きたのか。解釈は「指し示す言葉」としてどう機能したかが評価されるのである。

その際、「指し示す言葉」としての解釈は、もちろん、どんな解釈でもいいというわけではもちろんないが、その一方でまたたった一つの解釈に規定されているわけでもない。

心理療法の状況は、このように、心理療法家にとって、たえず「半ば自由で、半ば規定された状況」である。そして、心理療法家は、各々の治療状況において、絶えず、それに適合したある行為を「求められている」。そして、まさにその治療状況にぴたりとくる行為をおこなうことで、治療状況の何かは新たに浮かび上がり、何かは明らかになる。そこで次に何をなすべきかも、プロセスのほうから自ずと指し示される。これが、ジェンドリンの言う「解明」の過程である。

いずれ、この「解明」という観点から、治療場面における心理療法家やクライアントのふるまいを、心理療法の事例に即して分析してみたい。

〔註〕

(1) 諸富祥彦「E. T. ジェンドリンの哲学(その1) — 現代哲学のアポリア —」(『千葉大学教育学部研究紀要第47巻 I』27-36頁 1999).

(2) 次の二つの論文である。

E. T. Gendlin, "What are the Grounds of Explication? : A Basic Problem in Linguistic Analysis and in Phenomenology" *The Monist*, Vol.49, 1965, pp.137-164 (以下, WGE. と略記する)。

E. T. Gendlin, "Experiential Phenomenology" in M. Natanson(ed.), *Phenomenology and the Social Science*, 1973, pp.281-319 (以下, EP. と略記する)。

(3) EP., p.290.

(4) *ibid.*, pp.290-291.

(5) *ibid.*, p.291.

(6) ジェンドリンは、言明が経験に対して与えるこの変化に関して、言語や状況との関連において、次のように述べる。

「我々はしたがって、次のように言わなくてはならない。経験は、部分的には言語的に、また状況的に既に組織化されている。そして、言明の基礎づけのために経験(状況)を使用すると、経験をさらに組織化することになる、と。このさらなる組織化は、経験が初めから持っていたパターンとは異なる。しかし、経験が既に組織化されているその仕方とある関係がある、とも言わねばならない」(EP., p.293)。

ジェンドリンは「外的状況と言語と感情とは密接に関係しあっている」(*ibid.*, p.291)と考えており、上の引用にも明らかなように、言明が経験に対して与える変化の方向も、言語や状況による組織化によって、前もって半ば規定されている、とみなしている。ジェンドリン哲学のこういった構造的側面、経験が言語や状況によって組織化されており、一定の(不変ではなく)構造を有しているとみなしている点は、彼の思想の一面的理解を妨げるためにも、また、サルトルの実存主義や彼の心理学の師であるロジャーズの有機体論との異同を論じる際にも重要になってくる点である。この点についての検討は今後の課題としたい。

(7) EP., p.293.

(8) *ibid.*, pp.300-301.

(9) *ibid.*, p.300.

(10) *ibid.*

(11) *ibid.*, p.301.

(12) *ibid.*

(13) *ibid.*

(14) *ibid.*

(15) *ibid.*, p.302.

(16) 「解明(explication)」の特質として、ジェンドリンは次の点を挙げる(WGE., p.150.)。

(a) 我々を新しい側面の気づきに導く言明が全て解明なのではない。客観的基準によって、存在していたが気づかれていなかった多くの事実を言明することが可能。新しく気づかれた側面が、以前から暗黙には知られていたと確信できる時だけ(if we were sure that new aspect was implicit before), 解明と呼ばれる。

(b) この新しい側面はいったん気づかれると再び気づきえなくなる(unnoticeable)ことはない。

(c) 新しく識別された側面の持つ力は、言明に全面的に依存してはいない(not totally dependent on the explication statement)。言明を捨てても、この新しく気づかれた側面は消えない。

(d) この新しい側面は、言明からまったく独立してもいない(not fully independent of the variety of the statement)。

(e) 解明においては、論理的必然性に拘束される必要はないが、ある言明からその論理的特質のすべてを否定すると、その言明から識別力 (discriminating power) が消失する。

(17) WGE., p.159.

(18) EP., p.303.

(19) WGE., p.158.

(20) *ibid.*, p.163.

(21) *ibid.*, p.163.

(22) EP., p.303.

(23) *ibid.*, p.302.

(24) E. T. Gendlin, "Process Ethics and the Political Question", In : *Focusing Folio Vol.5*, 1987, p.71.

(25) *ibid.*, p.72.

(26) *ibid.*, p.73.